

「創造への接近」特集 関連文献の紹介

創造性開発の数学モデルと
Computer Based Design 研究会 石川 昭

創造と革新

Creativity and Innovation

出版社：New York：John Wiley & Sons,
1979.

Harry Nyström 1-125.

私企業を育成発展させていく場合、創造性と革新性の問題にいかにとりくんでいったらいいか明らかにしようとした労作である。

著者によれば、革新(Innovation)とは、Thompson, Becker and Whisler が定義したように急激な、非連続的な変化であり、創造(Creativity)とは、そのような変化を成功裡に達成していく能力であると定義している。

まず第1章で私企業を育成発展させていく場合における創造性と革新性の必要を説き、第2章で後での分析のため著者の基本的私企業分類モデルを明確にしている。そこでは、革新性の方向とポテンシャルが2つの主要要因である。ついで第3章で組織の弾力性と多岐化が創造や革新に与える影響度を分析し、第4章で個人から集団としての会社での創造性過程への展開を試みている。

さらに第5章と6章では、私企業発展とマーケティング戦略および研究開発戦略についてそれぞれ触れ、その中で創造性と革新性がどのような役割を果たす必要があるか究明している。

そして最後の第7章と8章では、戦略策定への心理的、認知的(Cognitive)接近方法と、それらをふまえた上での、創造・革新要因の一般的経験指標を要約している。

創造性開発過程を数量化し電算化していく場合の領域と基本的方向を探るため有意義な基礎的文献であると思われる。

能力の構成と知能の開発

Psychological Review No. 75, 1968.

John L. Horn 242-259.

創造性開発と密接な関連をもつ知能(Intelligence)の指標の1つとして受け入れられている業績(Performance)は、少なくとも2つの要因と相互依存性を有し

ている。

その第1は、順応化知能(Crystallized Intelligence)と呼ばれるもので、人間能力を決定する新しいパターン、慣習あるいは文化への適応度から生ずるものである。

もう1つは、流動化知能(Fluid Intelligence)と呼ばれ、神経生理的な、そしてそれに付帯した偶発的学習効果のパターンから生起すると考えられる。この2つの知能は、幼児から大人になる過程で徐々に独立した成育過程をたどるようになる。

知能を測定評価し、それにもとづいて知能の効果の開発を計ろうとすれば、上記の知能の他に少なくとも、1) 感知方式機能(視、聴、触覚など)、2) 内分泌機能(特に応答速度など)、3) 性能型式機能(注意力、分別力など)、および 4) 動機化機能(業績向上の必要性認知など)を勘案していく必要があり、1)、2)は3)、4)を誘起するとも考えられる。

本論文では上記の知能開発論を支える結果が紹介され将来の所要研究が要約されている。なお本論文他29編の知能開発と測定に関する論文が、H. J. Eysenck の編集により、The Measurement of Intelligence (Lancaster, England: Medical and Technical Publishing Co. Ltd., 1973)の中に集録されている。

次号予告

特集 海外プロジェクト・マネジメント

プロジェクト発掘	三上 良梯
プロジェクト具体化	高橋 稔昌
エンジニアリング会社におけるプロジェクト・マネジメント・システム	那須 宗也
コンストラクション会社におけるプロジェクト・マネジメント	富岡征一郎
海外プロジェクトと損害保険	井爪 輝明
プロジェクト実施段階のリスクマネジメント	丹羽 清